

# TKCの王道を行く

## 「事務所に看板はいらない！」

今回は、2作目となる書籍「生き残る会社の先読み戦略」を出版された、秋田県支部の怖いけど面倒見の良いボス、長谷部光重支部顧問の竣工間もない事務所にお伺いしました。



税理士を超越して、経営コンサル、マーケティングで有名な先生にあえて、お聞きしますがTKCの良いところとは？

TKC以外は、やるつもりはありません。基本は、遡ってデータ改ざんができるないということが、国税に対しても、金融機関に対しても、最高のブランドだと思う。うちは財務に関してオンラインTKC。TKCシステムフル活用で、翌月巡回監査、FX2、書面添付、企業防衛、リスクも含めてTKCのいいところは全て標準化しています。まずそこをベースとして国税と金融機関に対して絶大なる信頼をもたせる。よく他社のソフトを併用するところがありますが、二度手間ですよ。頭二つ持たなきゃいけないんですから、監査担当者が疲れると思いますよ。

### 「先読み」とクライアントのニーズウォンツの変化について

例えば、現在、プランナー、プロデューサーとして、進行中のプランニングの仕事を複数手がけていますが、プランニングというのは現在

進行形で、1年前、2年前から準備してくるもので、やっていないと分からないし、常にやっている人がノウハウとネットワークを手に入れ、そこに良い情報が集まる。先を見据えた仕事。「先読み」が必要なわけですよ。

日本の法人の7割が赤字なわけだから、クライアントのニーズは、生き残るために黒字化に向いてきます。当然経営に対する相談に応じられる会計事務所が求められてきます。うちは20年前から、コンサル、マーケティングが要求されると「先読み」して準備し、対応してきたわけです。

TKCでは「ビジネスドクター」といっていますが、処方箋が書けなくては「ドクター」とはいえない。それにはマーケティングがかかせないんです。うちでは経営に関する大部分を事務所内でプロ化してカバーできるようになっている。マーケティング上も選ばれる会計事務所になるにはワンストップがいいからね。



デザイン事務所のような事務所

### ネットワーク化、人脈について

しかし経営の問題には様々なものがありますから、当然うちだけでは対応できないわけです。クリニック開業支援業務や立地診断と業態変化プランニングというプロの部分があって、それ以外にもデザイン、設計、不動産、建築、医療

機器メーカー等が電話一本で即座に動けるような体制、さらには、税理士、弁護士、司法書士、不動産鑑定士、中小企業診断士、等とのビジネスネットワークは、すべてはお客様の夢の実現のサポートのために必要な「チーム長谷部」の外部スタッフなわけです。顧問料はもらうものではなく、払うものというぐらいの気持ちです。「あなたは顧問税理士を雇えますか。」

### 我々がコンサルをするにはどうすれば

税理士が、コンサルをやるには、お客様目線になれるかどうかなんです、いわゆるCSです。そのためには税理士だTKC会員だという「バッチ」を心の中で捨てないと、後は、知識、経験、ノウハウの積み重ねにより「感性」を磨くことでしょうね。いずれにしても一朝一夕には出来ないということです。



所長室にはピエンナーレ金賞受賞の韓国のアーティストの作品

### 机の上にレポートの束がありますが

今も学生に提出させたレポートの添削をしていたところだけれども、秋田大学大学院から講師依頼を受けてマーケティングの講座を大学院にもって、もう4年になる。こういうこともすごく重要なんです。講義の回数分のネタを準備するだけでも大変なんだけど、若い人財を育てていかなくてはいけないという使命感かな！



### 看板がないようですが

デザイン性の高い建物そのものが看板、そして、中で働くスタッフがブランド、だから看板はいらない。経験から言うと飛び込みで来る素性の分からないお客様の質は決して高くはないし、ネットワーク、金融機関やクライアントからの紹介がメインであり、うちのクライアントは場所を知っているわけですから。

### 後発会員へのメッセージがございましたら

今の若い人に言いたいことは、自分と感性が合う人だけと連むなということ。自分と違う感性とか、自分と違う価値観には、必ず「心の摩擦」が生ずる。そこにヒントや、新しい発想が生まれます。

「先読みして先を走っている者は、概して邪道扱いされるが、時代が追いつくと王道になる。」ということです。

新しい時代のトップランナーとしての「感性」事務所を目指して欲しいと思います。

### 取材を終えて

今でこそコンピューター会計は当たり前ですが、飯塚毅先生もコンピューター会計を始めたころは、税理士会で異端者扱いを受けていたそうではないですか。長谷部顧問、お忙しい中、時間を作って頂き、ありがとうございました。

(取材者：菅原智司)